

「家がいいね」 第144号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

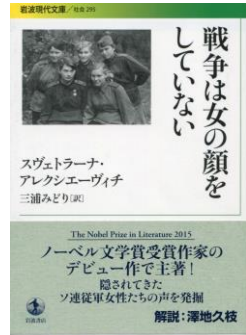
2016. 5. 6

「生き直す」ということ

80歳手前の柳田邦男さんの講演を聴きました。事件や事故を論じ生きることと考え続けてきた人ですから、聴くたびに時代の変化を考えます。



亡き兄の想いを引き継ぐ兄嫁の人生、「死を生きる」庶民の在り方に話は及び、聴き取る力を持ち、人生を常に生き直す重要性を訴えられました。
回顧とは、起きたことを、そしてあとかたもなく消えた現実を冷静に語り直すということではなく、時間を戻して、過去を新たに生み直すこと。語る人たちは、同時に創造し、自分の人生を「書いて」いる。「書き加え」たり「書き直し」たりもする。そこを



注意しなければならぬ。(右の本の6頁を引用)

秋山正子さんたちの「聞き書きボランティア」、市原美穂さんたちの「聞き書き隊」という活動は在宅ホスピスにとって大切なことだと思えます。

山頂(サミット)に人は住めない

人の生活はいつものように麓に在る。そこに飛び込んできたサミットは、慌てて作り、かつ取り壊す高級テントの政治的な催しだ。いずれも戦争に関わる首脳ゆえテロに怯えるのだろう。政(まつりごと)ではあっても祭りではない。息苦しいばかりの警備を生活に押し付けるのはオカシイ。



良識ある外国人は言う。

私達が体験したい「おもてなし」は普段の日本の生活の中にある。もみ手での歓待の中にはないと。

山が萌黄色に笑います。藤の紫は、髪飾りに似て。



在宅医療って何だろう。いまさらながら。

一般の方々に在宅医療は馴染みのあるものでもまだまだ無いようです。診療所に通院し、身体が不調になれば入院し、自宅へ戻れないと言われれば施設に入所するという流れが主のようです。慣れ親しんだ家や家族への思いは、あっさり捨て去ってもいいのでしょうか。在宅医療は相談が主体です。自分の思いを語るころから始まります。

映画「つむぐ」と在宅医・船戸先生の講演

みえ生と死を考える市民の会18周年記念講演会

講師 船戸崇史さん(岐阜県在住)

「在宅医が看取りの中で考える」

7月24日(日) 13時~16時。

津市 アスト津4階ホール(津駅東口に隣接)

一般1000円 会員500円 前売券は当院で



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105

メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可